

大日さんと村人たち（上内神）

むかしむかし、日羅上人にちらしやうじんというえらいお坊さんが海を渡り、はるばる日本にやって来られました。

そのころは疫病えきびやうが各地で流行はやり、毎日のように村人たちがなくなっていました。元気な人もいつ病気ににかかるかと不安な日々を過ごしていました。日羅上人は人々を救おうと、一心にお経を唱え続けられました。

そんなある夜、上人の枕元に仏様のような姿が現れ、「北方の三国の境あたりに霊木れいぼくがある。その木で仏を彫り、お経を唱えなさい。きつと功德くどくをえることができるだろう。」

と告げられたのでした。

上人はさつそく撰津せんつ・播磨はりま・丹波たんばが接する国境に行つて霊木を探し出しました。その木を伐り、上内神かみうちがみの永禅寺えいぜんじ谷にある天薬寺てんやくじに運ばせました。上人は人々の苦しみを思い、病魔退散びやうまたいさんを願いながら、全身全霊ぜんしんぜんれいを打ちこんで彫りましました。すると驚くことに、お告げを下さったあのお姿になつてゆきました。それは、大日如来だいにちにょらいのお姿だったのです。

村人たちは大日如来に向かつて疫病がしずまることを願ひ、毎日毎日心を込めて拜んでおりました。

そんなある日のこと。上人は「薬師如来やくしにょらいも彫るがよい。」と大日如来がつぶやかれたように思えました。

上人はそのお言葉を信じ霊木を刻んだところ、薬師如来のお姿が現れ、さらに三仏目、四仏目と現れてきました。

そして、五仏目が現れたころには、あれほど人々を苦しめていた疫病おきが治なりまってきたのです。

「なんと、ありがたいことだ。」

村人たちは、さつそくお堂を建てて大日如来をはじめ、五体の仏様たちをおまつりしました。

村人たちを疫病から救つてくださった大日如来のことは時代を超えて語り継つがれました。その後も疫病が流行ったことがありましたが、この寺が祈願所となり、大がかりなご祈きと禱とうが行なわれたということです。村人たちは、大日如来がおられることをとても心強く思うのでした。

時代は移つて、戦乱の世になりました。お坊さんたちもお寺を守るため、武芸のけいこに励はげむようになりました。

織田信長が天下統一をしようとしていたとき、西国で



は、毛利輝元もうりてるもとが大きな力を持っていました。二つの勢力の中間地点にある上内神の村人は、いつ戦いが始まるのか心配でなりませんでした。

「今度の戦では、寺はどっちにつくのじゃろう。」

「何としてでも如来にょらいさまはお守りせねば……。」

まもなく戦いが上内神にも及およびできませんでした。天薬寺てんやくじが攻められました。お坊さんたちは寺から出て戦いましたが、そのうち僧舎から煙が上がり、焼けてしまいました。

ようやく火の手がおさまったころ、村人たちはおそろおそろ外へ出て、あまりの様子に目をおおいました。

いくつもの亡なきがらがあちこちに散乱さんらんしています。村人たちは敵も味方もなく手厚とゆうく叩たたきました。

「如来さまはどうなったんやろ。」

「山の中にお隠かくしたから、大丈夫だとは思いますが……。」

村人たちは、確かめに行きました。如来さまはご無事でした。

しばらくして戦いがおさまったころ如来さまを山からお連れし、山すそに残っていた三千坊という僧舎におまつりしました。それ以降如来さまを隠していた山を大日山と呼ぶようになったということです。

やがて、国は統一され、戦国時代は終わりました。豊臣秀吉が上内神を通った時に、大日如来さまを参拝され、

「この大日如来は、ほかの四体の如来とおられてこそ、ありがたいが増す。このようにそろっているのは、めつたにござらぬ。お堂を新しくしてまつられよ。」

そう言い残して、秀吉は有馬へ向かわれたそうです。そのおかげで大日堂ができました。

村人たちは大日如来とほかの如来をあわせて「大日さん」と呼び、疫病えきびょうから守っていたただくことの他にも、家族の安泰あんたい、農作物の豊作、牛馬の安全をお願いしました。縁えん日には露店ろくてんも出ました。お堂には牛のわらじや絵馬がたくさんぶら下がり、おおぜいの人で大にぎわいでした。

このように、大日さんは村人たちを守り、村人たちも大日さんを大切にしてきたということです。